

社会の「あるべき生き方」に沿えない若者のひきこもりと、 アイデンティティの再構築による回復

研究代表者 松山大学経営学部 准教授 日原 尚吾

Hihara Shogo

共同研究者 広島大学大学院人間社会科学研究科 教授 杉村 和美

Sugimura Kazumi

共同研究者 広島大学大学院人間社会科学研究科 博士課程前期学生 安居 元紀

Yasui Genki

研究の要旨

ひきこもりは現代日本の青少年育成における重要課題である。本研究は、青年の個人内または身近な他者との関係性に限られてきた研究の焦点を拡張し、ひきこもりを「現代日本の社会・文化と結びついた病理」として検討することを試みた。具体的には、社会文化の中で期待される「あるべき生き方」であるマスター・ナラティブに沿えない青年が、アイデンティティを発達できずにひきこもりに陥る可能性に着目した。また、そうした青年が「あるべき生き方」とは異なる生き方であるオルタナティブ・ナラティブを構築し、それに基づいてアイデンティティを再構成する過程を検討した。日本人青年96名に対する面接調査を行い、ひきこもり傾向を持つ青年が、広い社会文化の「あるべき生き方」の期待と交渉しながら多様なアイデンティティを発達させる様相を、量的・質的分析によって示した。

1. 研究の目的

ひきこもりは、社会との接触を断ち、孤立する現象を指す。日本では、15 から 39 歳の人口のうち 54.1 万人がひきこもり状態にあると推計されており（内閣府，2016）、ひきこもりは現代日本社会の青少年育成における、喫緊の課題である。従来のアプローチでは、ひきこもりの背景として、発達障害や社会的スキルの不足、親の養育など、個人内または身近な他者との関係性の要因が注目され、研究と支援が行われてきた（レビューとして、Kato et al., 2019）。しかし、ひきこもりの青年は増え続けている。この現状に基づき、新たに青年を取り巻く社会文化の観点を導入し、ひきこもりを「現代日本の社会・文化と結びついた病理」として検討するアプローチが注目されている（鈴木他，2014）。

青年は、社会文化の中で様々な「あるべき生き方」を期待されている（例えば、『卒業後すぐに就職すべき』）。多くの青年は、そうした期待に沿う形で「社会の中で何をして生きるのか」という自覚であるアイデンティティを形成し、健全に発達する。一方で、様々な理由から社会文化の期待に沿うことができず、アイデンティティを発達できないためにひきこもりに陥っている若者も存在すると考えられる。しかし、今日に至るまで、ひきこもりを「現代日本の社会文化と結びついた病理」として検討するアプローチでは、この複雑な過程を実証的に検討することが困難であった。そこで本研究は、個人が社会文化と交渉してアイデ

ンティティを形成するダイナミクスを理解するのに適した「マスター・ナラティブ・アプローチ」を新たに導入して、ひきこもりの特徴をもつ青年のアイデンティティ発達の様相を明らかにする。

1.1 青年のアイデンティティ発達

アイデンティティとは、時間・空間にわたって自己に一貫性があり、「社会の中で何をして生きるのか」が明確になっている自己の感覚である（Erikson, 1968）。青年の周りの他者や社会は、青年がアイデンティティ発達の課題に取り組み、社会の一員としての役割を担うことを期待している。こうした期待は、青年に対して「あるべき生き方とは何か」という期待として提示され、この期待に沿って自身の人生を考えることは、アイデンティティの発達に重要な役割を果たす（Gallagher et al., 2017）。青年が社会文化の期待に従わなかった場合、アイデンティティの発達につまずき、精神的健康などに課題を抱える可能性がある（Syed & McLean, 2016）。

このように、アイデンティティ発達において、青年と社会文化は密接に結びついているにもかかわらず、アイデンティティ発達の研究では社会文化の役割を比較的軽視してきた。従来のアプローチでは、青年が自身のアイデンティティを探求し傾倒するという、個人の内的動機に焦点を当ててきた（Crocetti, 2017）。こうした研究では、青年のアイデンティティと社会文化を2つの分離した「箱」として捉えており、青年が社会文化の期待をどのように認識するのか、青年はアイデン

ティティを発展させるために文化的期待とどのように交渉するのか（受け入れたり拒否したりすること）を明らかにすることが難しかった (McLean & Syed, 2016)。

1.2 マスター・ナラティブ・アプローチ

この限界を克服するために、本研究は、青年が社会文化の「あるべき生き方」という期待と交渉することによって、どのようにアイデンティティを発達させるのか捉えるマスター・ナラティブ・アプローチを用いた（以下、MN アプローチ; McLean & Syed, 2016）。青年は、自分の人生について説明する「自己語り」を作ることを通して、自己の一貫性や社会との関わりを認識し、アイデンティティを発達させる (McAdams & Pals, 2006)。マスター・ナラティブ（以下、MN）は社会文化で共有された「あるべき生き方」の期待であり、青年が自身の人生を語る際のテンプレートを提供する（例えば、「卒業後すぐに就職すべき」）。MNは長い歴史の中で構築されたものであり、その社会文化の多くの人々が利用できる (McLean & Syed, 2016)。また、社会文化の中で権力を持った人々（裁判所、選挙で選ばれた役人、宗教的権威など）によって、自分たちの利益のために長期にわたって維持される。青年は、MNの一部に（無意識のうちに）適合することで、社会文化の期待に沿ったアイデンティティを発達させる。

しかし、すべての人が MN に従ってアイデンティティを発達させられるわけではない。社会の辺縁に置かれ、抑圧され、権力を持たない人々ほど、MN から逸脱しやすい (McLean et al., 2018)。様々な理由で MN に沿えず、アイデンティティ発達に困難を抱える青年が存在する。こうした青年は、自身が沿うことのできない MN を明確に意識するとともに、MN とは異なる、または反抗する語りである、オルタナティブ・ナラティブ（以下、AN）を構築することがある (McLean & Syed, 2016)。AN を構築し、精緻化することは、たとえ MN から外れていたとしても、青年が自身のアイデンティティを再構築し、社会の中で受け入れられる生き方を見つけることを助けると考えられる（例えば、「就職に苦労したからこそ、就職に苦しむ人に寄り添う生き方ができると思うようになった」）。

1.3 ひきこもりの特徴をもつ青年への適用

ひきこもりの特徴をもつ青年は、日本における急速な社会文化的変化の中で、「あるべき生き方」という期待に沿えず、アイデンティティの発達に困難を抱えていると考えられる (Sugimura, 2020)。社会的な変化としては、過去数十年にわたる経済不況により、終身雇用制度や年功序列賃金制度が崩壊を始め、非正規雇用やパートタイム雇

用のような不安定な雇用形態が増加した。

文化的価値観も変化している。日本は伝統的に、他者との協調や親孝行を重視する集団主義的な国とみなされてきた (Triandis, 1995)。しかし、グローバリゼーションの進展により、日本では主体性や他者からの独立を重視する個人主義が徐々に力を持つようになってきた (Arnett et al, 2014)。この変化の中で、日本の青年は、伝統的な社会構造の支えがないまま学校教育を終え、社会に参入する難しさを経験している (Brinton, 2011)。

このような社会文化的な変化の中で、青年は社会の中で何をして生きるのかというアイデンティティの発達に困難を抱え、ひきこもっている可能性がある。個人主義と集団主義を反映する2つの相反する MN の間で、自己の独自性を見出すことへのプレッシャーが高まっているにもかかわらず、親や教師から伝統的な集団主義的な価値観（例えば、親孝行や社会的調和）に従うことを依然として期待されているのである (Brinton, 2011)。一方の MN に従おうとする青年は、もう一方の MN から逸脱してしまい、自分のアイデンティティを社会文化の期待と統合することが困難になってしまう（例えば、自分は音大に行って音楽家になりたいが、両親は安定した職業に就かせたいので反対している）。このような青年にとって、社会との関係性の維持と社会における自立の両方を放棄する AN は、MN に静かに抵抗するための手段となっている可能性がある。一方で、一度 MN から外れてしまいひきこもりを示した青年であっても、MN とは異なるやり方で社会文化に受け入れられる AN を構築し、社会への参入を助けるアイデンティティを発達させられるかもしれない。

本研究は、ひきこもりの特徴をもつ青年が、社会文化との相互作用の中でどのようにアイデンティティを発達させているのかを検討した。具体的には、ひきこもりの傾向をもつ青年が、MN から逸脱しながら AN を精緻化する過程を検討した。このために、以下の2つの仮説を量的分析によって検証した。仮説1では、ひきこもり傾向の青年は、一般の青年よりも MN について明確に語りやすい（精緻化している）と予測した。MN から逸脱した青年は、自身のアイデンティティ発達を制限している MN について深く考えざるを得ないからである。仮説2では、ひきこもり傾向の青年は、一般の青年よりも、AN を構築し精緻化していると予測した。これらの量的分析の後、質的分析を用いて、ひきこもり傾向の若者が沿うことのできない MN と彼らが構築する AN の内容を検討した。質的分析の指針は、「ひきこもり傾向の青年はどの

ようなMNに沿うことができず、どのようなANを構築するのか？」という問いに沿うものである。

2. 方法

2.1 参加者と手続き

研究参加者は2段階の手続きで募集された。第1段階として、171名の日本人青年が、オンラインのスクリーニングの質問紙に回答した（平均年齢20.77歳、標準偏差2.12、年齢範囲は18歳から27歳、男性39%、女性60%、その他の性別1%）。参加者の募集は、中四国の国立大学であるX大学および、全国の青年を対象とするウェブページ (<https://www.jikken-baito.com/>) を利用して行った。これらの参加者の内、ひきこもり質問票 (HQ-25; Teo et al., 2018) の得点がカットオフ水準より高い参加者をひきこもり傾向をもつ青年とみなし (68名)、カットオフ水準より低い青年を一般青年とみなした (103名)。

第2段階では、半構造化面接への参加を求めた。ひきこもり傾向を持つ青年の内、面接への参加に同意した者を「ひきこもり傾向群」とした (41名)。一方で、一般青年のうち、面接への参加に同意した者を「一般群」とした (55名)。

最終的に、分析対象となったのは96名の日本人青年であった (平均年齢21.55歳、標準偏差2.25、年齢範囲は18歳から27歳、男性39%、女性60%、その他の性別1%)。参加者の半構造化面接の内容は録音された (面接時間は21~69分)。データは2021年11月から2022年3月の間に収集された。参加者には1,000円が支払われた。本調査は、広島大学大学院人間社会科学研究科倫理委員会の承認を得て実施された。

2.2 測定尺度

2.2.1 ひきこもり傾向

ひきこもり質問票 (HQ-25; Teo et al., 2018) を用いた。この尺度は、25項目の自己評価式の質問紙である (項目例:「一日中ほとんど自宅で過ごす」)。各項目は0 (あてはまらない) から4 (あてはまる) までで評価された。合計点は0から100の範囲であった。先行研究では、ひきこもりの診断の有無を弁別するカットオフ得点 (42点) が示唆されている (Teo et al., 2018)。そこで本研究では、この得点を用いて、ひきこもり傾向をもつ青年を特定した。

2.2.2 面接の内容

半構造化面接の本質問には、Master narrative deviation interview (McLean et al., 2018) の日本語版を用いた。具体的には、以下の通りである。

あなたはこれまでに、自分自身のライフストーリー

ーが、「普通だ」とか「期待通りだ」とか「一般的だ」とか思われるようなストーリーから外れていると感じたことがありますか？それによってどんな気持ちになり、どんな (どれくらいの) 影響をうけましたか？もしそのようなことがあれば、おしえてください。人生の何か具体的な出来事についてそう感じたことでもいいですし、人生全般についてそう感じたことでもいいですし、そのどちらとも言えないことでも構いません。

本質問の後、参加者がどのようにMNと関わりANを構築するのか、また、MNやANの内容をより詳細に理解するために、追質問を行った。具体的には、以下のような質問を行った。(1)「あなたの人生において、逸脱の経験はどの程度重要ですか、また、あなたの逸脱の経験はあなたにとってどのような意味がありますか」。(2)「他者が期待する『普通』あるいは『一般的な』ライフストーリーとはどのようなものだと思いますか」。(3)「あなたの期待する『普通』あるいは『一般的な』考えを共有する他者とはどのような人たちだと思いますか」。(4)「あなたが『普通』あるいは『一般的な』ライフストーリーを意識するようになった過程を、最も古い出来事からできるだけ具体的に述べてください」。(5)「逸脱体験について誰かに話したことがありますか？話したことがある場合は、相手の反応を詳しく説明してください」。(6)「『普通』あるいは『一般的な』ライフストーリーについてどう感じますか、また、それを期待する他人についてどう感じますか」。(7)「『普通』あるいは『一般的な』ライフストーリーから逸脱した経験は、あなたの今後の人生をどのように豊かにすると思いますか。また、どのように他者や社会に貢献できると思いますか」。

2.3 自己語りの評定

参加者の自己語りを量的に評定した。

2.3.1 MNの精緻化

社会文化において広く普及しているMNを、参加者がどの程度明確に認識し、説明しているかを評定した。MNの精緻化は1から3点の範囲で評定された (McLean et al., 2018)。得点が1であれば、MNについての言及がまったくないことを示し、得点が3であれば、MNについて洗練された詳細な記述があることを示す。2名の評定者間の級内相関 (Intraclass correlation; ICC) は0.74であり、評定の信頼性は十分であった。

2.3.2 ANの精緻化

参加者がどの程度ANを明確に構築しているかを評定した。ANの精緻化は1から4点の範囲で評定された (McLean et al., 2018)。得点が1であれば、ANについて全く言及がないことを表し、得

点が4であれば、ANが明確で精緻化されており、十分な主体性を含んでいることを表す。2名の評定者間の級内相関は0.74であり、評定の信頼性は十分であった。

3. 結果

3.1 量的分析の結果 (仮説 1.2)

記述統計を表1に示す。性別とMNの精緻化、ANの精緻化との関連を検討した。その結果、性別とMNの精緻化との関連 ($t(2, 93) = 1.10, p = .34$)、性別とANの精緻化との関連 ($t(2, 93) = 1.28, p = .28$)は見られなかった。加えて、年齢とMNの精緻化、ANの精緻化との関連を検討した。その結果、年齢はMNの精緻化 ($r = .09, p = .93$) およびANの精緻化 ($r = .05, p = .57$)とは関連は見られなかった。MNの精緻化とANの精緻化の間には正の相関がみられた ($r = .44, p < .001$)。

表1. 記述統計

変数(最小-最大)	全体	男性	女性
	M(SD)	M(SD)	M(SD)
MNの精緻化(1-3)	2.28(0.55)	2.32(0.47)	2.07(0.47)
ANの精緻化(1-4)	2.31(1.18)	2.24(0.60)	2.36(1.24)

注) Mは得点の平均値, SDは標準偏差

仮説1を検証するために、Welchのt検定を行い、ひきこもり傾向群と一般群の間でMNの精緻化得点を比較した。MNの精緻化得点は、一般群と比較して、ひきこもり傾向群で有意に高かった(表2; $t(77) = 4.59, p < .001, d = .97$)。したがって、仮説1は支持された。

仮説2を検証するために、Welchのt検定を行い、ひきこもり傾向群と一般群の間でANの精緻化得点を比較した。ANの精緻化得点は、一般群と比較して、ひきこもり傾向群で有意に高かった(表2; $t(78) = 2.88, p < .010, d = 0.61$)。したがって、仮説2は支持された。

表2. 各群の平均値と標準偏差およびt検定の結果

	一般群		ひきこもり傾向群		t値	df	d
	M	SD	M	SD			
MNの精緻化(1-3)	2.07	0.47	2.56	1.06	4.59	77	0.97
ANの精緻化(1-4)	2.02	1.06	2.71	1.23	2.88	78	0.61

注) Mは得点の平均値, SDは標準偏差, dfは自由度, dは効果量
** $p < .01$, *** $p < .001$

3.2 質的分析の結果

本報告書では、本研究の中心的なテーマである、MNの内容分析の結果に重点的に報告する。

3.2.1 MNの内容の分析

日本の社会文化の中で、ひきこもり傾向の青年が沿うことのできないMNの内容を検討するため

に、質的分析を行った。質的分析の対象は、ひきこもり傾向の若者41名である。自己語りから重要なテーマを抽出するための分析であるテーマ分析(Braun & Clarke, 2006)の結果、2つのテーマが抽出された。各テーマには、それぞれ2つずつのサブテーマが含まれていた。

第一のテーマは、「相互協調的自己観に基づく協調性」であった。協調性とは、愛情や友情、対話による広い社会集団との関係を通じて、対人的なつながりを表現することである(McAdams & McLean, 2013)。このテーマの背景には、集団主義的価値観の構成要素として相互依存的自己観が浸透していることが考えられる。相互協調的自己観とは日本において支配的な人間観であり、他者への配慮、他者との調和的な関係が規範として強調される(Markus & Kitayama, 1991)。

サブテーマの一つ目は、「協調的な友人関係」であった。日本を含め、相互協調的自己観が支配的な社会文化では、友人と協力的であること、調和的な関係を維持することが期待されている(Markus & Kitayama, 1991)。ひきこもり傾向の青年は、同年代の友人と多少の相性の悪さを感じても、協調的な関係を維持することが普通の人間関係として期待されていると語った。例えば、参加者Aは、それぞれの環境でうまくいかない人間関係を修復できなくても、小学校、中学校、高校と友人関係を広げていくことが普通の人間関係であると述べた。

小学校、中学校、高校とそれぞれの環境で出会った人たちと関わって、友好関係を広げていって、人間関係がうまくいかないことがあっても修復しながら、学校の行事とかで友人と楽しくして、卒業していくっていう。つまり、人との関わり方を学んでいくものだと思っている。

また、ひきこもり傾向の青年は、同年代との典型的なコミュニケーションや流行の共有を普通の人間関係として意識していた。以下は、小学生時代に同年代との典型的なコミュニケーションについていけなかった参加者Bの語りである。

一般的なライフストーリーとして思い浮かべているのは、幼稚園から小学校、中学校、高校、大学まで行って、良い人間関係を築いて、周りの人と信頼し合ったりすることです。喧嘩とか、関係が合わないとかいざこざとかはあって当然だと思うんですけど。(中略) 小学校3年生から対人関係の中の合わなさ、困難さというか、普通に小学校の友達が接している形で対人関係を築くのがすごくつらかったんですね。例えばじゃれ合い

とかよくありますよね、小学校の頃って。ああいうのがすごく嫌で、小学校4年生の時に転校したんですけど、まだ終わらなくて、結局それが爆発する形で中2の時に学校に行かなくなったんです。

参加者Bは小学生時代の典型的なコミュニケーションを「じゃれ合い」と表現し、それが嫌で不登校になった経験を語った。このように、ひきこもり傾向の青年は、同年代に典型的なコミュニケーションや流行の音楽などの趣味を楽しめない、人に合わせられないなどを明確に意識する傾向が見られた。このように、協調的な友人関係への期待は、典型的なコミュニケーションや流行の趣味の共有という形で、日常的な相互作用の文脈に潜在的に埋め込まれていた。典型的なコミュニケーションや流行の趣味は社会文化で広く共有されているため、協調的な友人関係のMNは、多くの人々が無意識のうちに影響を受けている可能性が高い。しかし、ひきこもり傾向の若者は、同年代の典型的なコミュニケーションや流行の趣味を共有することができず、孤立することで、このMNを強く意識したと考えられる (McLean & Syed, 2016)。

サブテーマの二つ目は、「調和的な家族像」であった。家族の結束は、青年の発達に重要な役割を果たしている (Cheng et al., 2021)。ひきこもり傾向の青年は、自分の家族とは対照的に、まとまりのある調和的な家族という「普通の家族像」について語った。例えば、高校入学時に父と母が別居し、母と二人暮らしをしている参加者Cは、自分の「普通の家族像」を次のように表現した。

他の人と話していて、家族っていうと父母が家にいるのが当たり前っていう、観点が返ってきて、うちは普通じゃないんだなってずっと思ってた。東京23区の葛飾区くらい、または地方の中核都市に住んでいて、お父さんとお母さんと妹と自分の4人の家族で犬が1匹いて、そういう何不自由ない環境で自分の行くべき、または行きたいと思った学校に進み、大学を出て、何事もなく就職するのが普通のライフストーリーかな。そのライフストーリーを意識したきっかけはドラマの家族を見て、うちと全然違うなという違和感だった。あとは子供向けの小説だと機能不全家族って全然出てこないの、自分の家族と小説の家族を対比させたときに、これが普通とか正解だろうなと思った。

このように、ひきこもり傾向の青年は、友人との会話やメディアとの接触を通じて、親子や家族間の結束や親密さをイメージし、その家族像とは

異なる自分の機能していない家族への違和感を表明していた。また、両親が不仲で家庭内別居中の参加者Dは、自分の家庭と比較して幸せな家庭のイメージを具体的に語った。

家庭団欒は経験してこなかったし、うちでは、母はご飯作らない。父が食べなかったり捨てたりするから、作らなくなった。私からすればご飯はみんなで食べるのが普通だと思うし。あと休みの日に家族で出かける。出かけても私と母で行って、父は家にいることが多くて。本当だったら旅行も全員で行くべきだろうなと思った。自分の家が普通じゃないって思ったのは小学校3年生ぐらいで、友達の家遊びに行ったときに、ちょっと違うなと思って。でも昔からドラマ見るのが好きだったから教科書とかに載ってそうな家族のイメージは幼稚園ぐらいからあった。

参加者Dは、普通の家族のイメージを「一緒に食事をしたり、旅行に行ったりする家族」と表現した。ひきこもり傾向の青年は、参加者Dのように、父親と母親がいる家族構成を前提に、家族全員が集団として行動し、仲が良いことを普通の家族像と表現した。しかし、このサブテーマを語った6人の参加者の家族は、機能不全家族やひとり親家庭であった。先行研究によれば、社会的ひきこもりの青年の家族の多くは、共感やコミュニケーションといった家族間の相互作用が欠如した機能不全家族やひとり親家庭である割合が高いことが示唆されている (Malagon et al., 2020)。ひきこもり傾向の青年は、両親や家族全員の仲が良く、団結している典型的な家族を思い描いていた一方で、彼らの家族は機能不全家族や親家族であったため、このような家族像をMNとして強く意識したと考えられる。

第二のテーマは、「他者と同質なライフコースの選択」であった。ひきこもり傾向の青年は、個人的な目標の達成よりも他者との同質性を重視する、集団主義的志向を強く意識していた。彼らは他者と同質なライフコースの選択から逸脱しつつも、そのライフコースを選択しなければならぬという不安を語った。

このテーマにおける一つ目のサブテーマは、「直線的なライフコース」であった。横並びが強調される集団主義において期待されるのは、他者と同質なライフコースをスムーズかつストレートに進むことである。これには、学校を中退せずに優秀な（世間に高く評価される）大学に入学し、そこから高収入の安定した仕事に就くことが含まれる。日本社会では、学校、就職、結婚という典型的なライフコースをたどることが期待さ

れている (Brinton, 2011)。本研究で対象としたひきこもり傾向の青年は、主に大学生であったため、大学から社会への移行を直線的に進むライフコースに着目しており、彼らの多くは、この直線的なライフコースから逸脱していた。ひきこもり傾向の青年は、直線的なライフコースを「ストレート」や「レール」という言葉で表現した。例えば、1年間の大学留年を通常のライフコースから逸脱した経験として語った参加者Eは、大学を卒業してすぐに安定した仕事に就くことを、通常のライフコースとして意識していた。

自分の周りだと大学まで行ってストレートで就職するというのと、親戚は公務員が多いので、そういった安定的な仕事に就くというのが、卒業後の一般的なコースかなと感じています。

参加者Eの語りのように、ひきこもり傾向の青年に期待される直線的なライフコースの特徴は、大学進学、就職、大学から就職への直線的な移行、安定した就職が周囲から期待されていることである。

こうした直線的なライフコースは、日本の伝統的な採用形態のひとつである「新卒一括採用」と密接に結びついていると考えることができる。新卒一括採用とは、大学や大学院の新卒者を卒業前に選抜し、卒業後に一括して採用する制度である。この採用形態には、実務に直結するスキルを持たない新卒者でも、集団として効率的に育成でき、安定した就職ができるという長所がある (厚生労働省, 2020)。このような採用形態は、個人の目標達成よりも集団の一員であることや集団の目標達成を重視する集団主義的な文化的背景によって、非常に有効な人材育成システムであると考えられている。

その一方で、卒業後に希望通りの就職ができなかった青年の就職先が限定される、個人の特性や事情によって就職や教育訓練が制限されるなどの短所もある。また、新卒一括採用は経済情勢によって大きく変動するため、不安定な側面もある。例えば、1991年から1993年までの不況期を経て、1993年から2004年までの「就職氷河期」と呼ばれた時期の新卒就職率 (その年に就職した新卒者のうち、進学者を除いた者の割合) は69.7%まで落ち込んだ (厚生労働省, 2020年)。しかし、このような不安定な採用形態に裏打ちされたライフコースを歩むことは、経済的成功や心理的充足など、日本人のアイデンティティの源泉として極めて重要であるため、日本の若者はそのようなライフコースを歩もうとする (Brinton, 2011)。ひきこもり症状の青年の語りには、周囲が直線的なラ

イフコースを選択したため、同質的なライフコースに固執することも示唆した。例えば、心因性の腹痛で高校を中退し、大学でも不登校だったGは、直線的なライフコース以外の進路を意識していたが、周囲が直線的なライフコースを歩んでいたため、他の道が見えず、直線的なライフコースを意識せざるを得なかった。

仮に高校大学に進まないとしても就職っていう道は確かにある。でも、周りの人は基本それになると思うので、周りの人が大学行ってるとなったらここで就職するのは違うんじゃないとか、今は、高卒でできる仕事ってすごい少ないんじゃないかって。大卒と高卒じゃ違うだろうっていうので。大学に行こうとは言ったものの、何かこれに興味あるってよりかは、大卒は大事だろうなって感じで選んでたので、他の選択肢が本当は自分もっとあるんだろうけど、自分は見えない物が多すぎて。だから大学今やめちゃったらもう何もないって思っちゃう。本当はそんなことないんだろうけど。

このように、ひきこもり傾向の青年は、直線的なライフコースから外れているがゆえに、不安を感じ、そうしたライフコースをMNとして意識せざるを得ない。これは、新卒一括採用などの伝統的な採用形態によって、固定化した社会構造が彼らに直線的なライフコースを歩むことを期待していると見ることもできる。

このテーマの二つ目のサブテーマは、「直線的なライフコースに対する親の強い期待」であった。ひきこもり傾向の青年は、親が直線的なライフコースを歩むよう促していると語る傾向があった。青年の親が若者の年代であった時代と比較して、経済の停滞から新卒者の非正規雇用の割合が増え、新卒者が安定した就職をする直線的なライフコースを歩むことは難しくなっている (Brinton, 2011; 厚生労働省, 2020)。しかし、現在では直線的なライフコースが機能していないにもかかわらず、親をはじめとする上の世代によって規範的価値観として期待されているため、MNとして青年のアイデンティティを制限している可能性がある (McLean & Syed, 2016)。例えば、参加者Gは高校卒業後、調理師専門学校への進学を希望したが、両親に反対され、両親の希望する大学へ進学した。現在、自分の選んだ進路に納得できておらず、両親の期待を次のように語った。

私は親が望んだものを歩んできたと思う。私は姉がやってきたことを高校までずっと真似していて、高校も、姉と同じところに行って、高校生ま

では姉が歩んだレールの上を歩いて来た。それが多分、親がこうあってほしいと思う自分の姿だっただと思っている。同じようなストーリーを描いてほしいのかなとは思っていた。いわゆる進学校とか大学、国公立とかそういうものを。

直線的なライフコースに対する親の強い期待は、青年と親の強い相互依存関係にも起因しているかもしれない。ひきこもりの家族は、新しい社会状況にうまく適応できない子どもを過度に保護し、外界から守る安全なシェルターを与えようとする傾向がある (Borovoy, 2008; Furlong, 2008; Umeda 2012)。親の過保護は、多くの日本の家庭が比較的裕福で経済的な制約が少ないこと、日本では政府による支援が不足しているため子どもが自立するまで家族が責任を持つことなど、さまざまな要因に起因している。このような傾向の背景には、儒教に根ざした親孝行の概念もあると考えられている。こうした家族関係では、子どもが自立するまで親が面倒を見る見返りとして、子どもは親を尊敬し、生涯にわたって親の面倒を見る義務があるという相互扶助の関係によって支えられており、西洋的な自立とは異なっている (Furlong, 2008)。

このように、ひきこもり傾向の青年は、親から直線的なライフコースを歩むことを期待され、そうしたライフコースを強く意識せざるを得ない。これは、ひきこもり傾向の青年の親が直線的なライフコースの価値観を内面化しており、それゆえに自分の子どもにも同じライフコースを期待していることが想定される。また、青年とその親との関係は相互依存的であり、成人後も強く残っていることが考えられる。ひきこもり傾向の青年とその親の相互依存関係、そして親と子の強い結びつきから、親の考えは子どもの行動に強く反映される可能性がある。

3.2.2 AN の内容の分析

AN の内容分析も、MN の内容分析と同様にテーマ分析 (Braun & Clarke, 2006) により実施した。AN の内容として、以下の3つのテーマが抽出された。全体的に見て、集団主義を反映した MN からの逸脱に対して、ひきこもり傾向の青年は多様なやり方で AN を構築し、アイデンティティの発達につなげていることが示された。

第一のテーマは、「個人主義的価値観の使用」であった。MN の内容分析では、集団主義的な価値観に根差した、他者との密接な関係性が強調された (例えば、親からの直線的なライフコースの期待)。こうした MN に沿うことができない青年がアイデンティティを発達させ、ひきこもり傾向を持ちつつも社会に参加して生きていく方法の一つは、近

年社会の中で影響力を増している個人主義的な価値観をテンプレートとして使用することなのだと考えられる。例えば、両親や友人が期待するライフコースに沿えなかった参加者 H は、以下のように語った。

周囲の期待とは異なり文系を目指した。当初は両親や友達からも驚かれたしいろいろ言われた。その反応を見て本当に自分の選択は間違っていないか考えたし好きなようにしたいと考えた。今では世の中にはいろいろな生き方があるし、どんな選択をしてもなるようになると考えてる。

第二のテーマは、「自分自身の目標を設定する」であった。このテーマの自己語りでは、第一のテーマのように集団主義的な MN に対して自身の独自性を強調して対抗するよりもむしろ、自身が心の底から取り組みたい物事や目標に集中する AN を構築して、自身のアイデンティティを発達させている特徴があった。例えば、社会に溶け込めていない、浮いている感覚を持っていた参加者 I は、以下のように語った。

明らかに社会から浮いてるなど気づくこともあって。自分のやってることはこの街で自分しかなくて話す人もあんまりないけど、それはもうスリルがあって面白い。それで美術からもう離れることができない人生なので美術に感謝してて、なんか言われても鉄の心があるっていうか、誰がどう言おうと心の底からやりたいことやってるんで、こうした方がいいんじゃないとか言われても別に関係ないなっていう。強い心は持っている。

第三のテーマは、「同じ MN から逸脱した他者の受容・支援」であった。第一・第二テーマは自分の独自性や個人的目標に焦点化する AN であったが、それ以外にも、社会の中で自分と同じく MN から逸脱した他者を受容し、支援することでも AN を構築することができる。これは、集団主義的な MN に沿うことができなかったひきこもり傾向を持つ青年が、その他のやり方で他者と協調して生きていく道筋を示している。トラウマ体験や精神的・身体的疾患をもつ人々が当事者グループを形成し、互いを支援し合う活動とも結びついていると考えられる。例として、参加者 J は以下のように語った。

学校が始まる時期で自殺者がすごい増えるけど自殺防止のために、NHK 特集が組まれていて。その中で不登校で悩んでいる人の声を拾ってくださるけど、そういうのは共感できるし、自分みたい

に外れちゃった、もう駄目じゃないかって思う人の気持ちは、外れなかった人よりかはわかると思って、そういう人の気持ちを、少なくとも見逃さないようにはできるようになったのかもしれない。

4. 考察

ひきこもりは現代日本の青少年育成における重要課題でありながら、その数は増え続け、先行研究はひきこもりの青年の個人内または身近な他者との関係性に焦点が限られている問題があった (Kato et al., 2019)。本研究は、新たに社会文化という広い観点を導入し、ひきこもりを「現代日本の社会・文化と結びついた病理」として検討することを試みた。具体的には、社会文化の中で期待される「あるべき生き方」である MN に沿えない青年が、アイデンティティを発達できずにひきこもりに陥る可能性に着目した。また、そうした青年が、社会文化と交渉して AN を構築し、それに基づいてアイデンティティを再構成する過程を想定した。以上をふまえて、ひきこもりの特徴をもつ青年のアイデンティティ発達の様相を面接調査によって検討した。

4.1 MN と AN の精緻化

量的分析では、MN から逸脱しながら AN を構築・精緻化する過程を検討した。仮説 1 では、ひきこもり傾向の青年は、一般の青年よりも MN について明確に語りやすい (精緻化している) と予測した。仮説 2 では、ひきこもり傾向の青年は、一般の青年よりも、AN を構築し精緻化していると予測した。上記の仮説を検証するために MN と AN の精緻化得点を比較したところ、ひきこもり傾向群は一般群よりもいずれの指標についても統計的に有意に高い得点を示した。つまり、仮説 1 と仮説 2 は支持された。これらの結果は、ひきこもり傾向の青年が一般の若者と比較して、アイデンティティ発達過程において、MN から逸脱し、その後 AN を構築・精緻化する傾向が強いことを示している。言い換えれば、ひきこもり傾向をもつ青年は社会文化で期待される「あるべき生き方」に従えないからこそ MN を強く意識するとともに、そうした生き方とは異なる、あるいは反抗する生き方に基づくアイデンティティの発達に取り組んでいることが示唆された。

4.2 MN と AN の内容

本研究では、ひきこもり傾向の若者が語る MN と AN の内容を質的分析によって検討した。テーマ分析 (Braun & Clarke, 2006) の結果、ひきこもり傾向の若者が沿えない MN として 2 つのテーマが抽出された。「相互協調的自己観に基づく協調性」と「他者と同質なライフコースの選択」で

ある。これらのテーマは、他者との協調や同質性を求めるという点で集団主義的側面が強い MN といえる (Triandis, 1995)。ひきこもり傾向の青年は、他者との協調や同質性を求める集団主義的な MN から逸脱しており、アイデンティティ発達に困難を抱えていることが示唆された。

一方で、ひきこもり傾向の青年が逸脱する MN として、個人主義的な内容は抽出されなかった。他者との協力や集団目標の達成を重視する集団主義とは対照的に、個人主義は他者と関わることの長所と短所を合理的に分析することを重視し、集団目標の達成よりも自身の目標の達成を優先する傾向がある (Triandis, 1995)。したがって、他者との協調や同質性を強調する集団主義的な MN に対抗するための AN として、個人主義的な自己語り参照される可能性が高い。

この解釈は、AN の内容分析の結果と一致している。AN の内容分析で得られた「個人主義的価値観の使用」および「自分自身の目標を設定する」のテーマは、集団主義的な MN に沿うことができずにひきこもり傾向を示した青年が、個人主義的な価値観をテンプレートとして使用したり、個人的な目標に傾倒したりすることを通して AN を形成できる可能性を示している。また、「同じ MN から逸脱した他者の受容・支援」のテーマが見られたことから、必ずしも個人主義的な価値観を採用しなくとも、同じ MN からの逸脱を経験した他者を受容・支援することで AN を構築し、アイデンティティを発達させられる可能性が示された。

以上の結果は、ひきこもりの特徴を持つ青年が、広い社会文化の「あるべき生き方」の期待と交渉しながら多様なアイデンティティを発達させる様相を示している。こうした結果は、これまで強調されてきた青年個人や近い周りの他者 (例えば、親) との関係性を超えて、広い社会文化の言説や期待を考慮することの重要性を示唆し、新たな研究・支援の可能性を開くものである。

5. 本研究の限界

本研究には 2 つの限界がある。第一に、本研究では、青年期のひきこもり傾向のスクリーニングに、自己報告式の質問紙である HQ-25 (Teo et al., 2018) を使用した。この尺度で測定される内容は、ひきこもりの感情的傾向を示すものであり、具体的な行動傾向は含まれていない。したがって、本研究でひきこもり傾向群に分類された青年が、実際にどの程度ひきこもりの行動的特徴を示すのかは不明である。今後は、ひきこもりの行動指標 (義務教育を含む就学回避の有無、パート・アルバイトを含む就労の有無、家庭外での付き合いなどの社会参加の有無など) を用いる

など、客観的な方法を取り入れることが有効である。

第二に、本研究は横断的な調査であり、ひきこもりの特徴をもつ青年が時間経過の中でどのように社会文化の「あるべき生き方」の期待と交渉したのかを明らかにすることはできなかった。今後は、青年の自然な会話場面を時間経過に沿って観察したり、同じ青年を追跡して面接したりすることで、ひきこもりの特徴をもつ青年が社会文化と交渉しながらアイデンティティを発達させる過程をさらに正確に把握することができる。

6. まとめ (結論)

以上の限界はあるが、本研究は、ひきこもりの青年の理解と支援のために新しいアプローチに基づく検討を行い、社会文化の「あるべき生き方」の期待に着目することの重要性を示した価値ある研究である。本研究の結果に基づいて、たとえば青年が「あるべき生き方」の期待に沿えなかったとしても、代わりとなる生き方を提示してアイデンティティの発達を促すことができるような、教育的・臨床的支援の提案が望まれる。

7. 発表論文

Yasui, G., Sugimura, K., & Hihara, S. (2023). *Identity development among "hikikomori youth" in Japanese culture: A master narrative approach* [Poster presentation]. The 29th Annual Conference of International Society for Research on Identity, June 8th, Medford, Massachusetts.

8. 参考文献

Arnett, J. J., Žukauskienė, R., & Sugimura, K. (2014). The new life stage of emerging adulthood at ages 18–29 years: Implications for mental health. *The Lancet Psychiatry*, *1*(7), 569–576.

Borovoy, A. (2008). Japan's hidden youths: mainstreaming the emotionally distressed in Japan. *Culture, Medicine and Psychiatry*, *32*(4), 552–576.

Braun, V., & Clarke, V. (2006). Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, *3*(2), 77–101.

Brinton, M. (2011). *Lost in Transition: Youth, Work, and Instability in Postindustrial Japan*. Cambridge University Press.

Cheng, W. Y., Cheung, R. Y. M., & Chung, K. K. H. (2021). Understanding adolescents' perceived social responsibility: The role of family cohesion, interdependent self-construal, and social trust. *Journal of Adolescence*, *89*(1), 55–62.

Crocetti, E. (2017). Identity formation in adolescence: The dynamic of forming and consolidating identity commitments. *Child Development Perspectives*, *11*(2), 145–150.

Erikson, E. H. (1968). *Identity, Youth and Crisis*. W. W. Norton & Company.

Furlong, A. (2008). The Japanese hikikomori phenomenon: Acute social withdrawal among young people.

Sociological Review, *56*(2), 309–325.

Gallagher, R. V., McLean, K. C., & Syed, M. (2017). An integrated developmental model for studying identity content in context. *Developmental Psychology*, *53*(11), 2011–2022.

Kato, T. A., Kanba, S., & Teo, A. R. (2019). Hikikomori: Multidimensional understanding, assessment, and future international perspectives. *Psychiatry and Clinical Neuroscience*, *73*(8), 427–440.

厚生労働省 (2020). 今後の若年者雇用に関する研究会事務局説明資料 厚生労働省 Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/content/11801000/000634510.pdf> (2023年2月29日)

Malagón-Amor, Á., Martín-López, L. M., Córcoles, D., González, A., Bellsolà, M., Teo, A. R., Bulbena, A., Pérez, V., & Bergé, D. (2020). Family features of social withdrawal syndrome (Hikikomori). *Frontiers in Psychiatry*, *11*. <https://doi.org/10.3389/fpsy.2020.00138>

Markus, H. R., and Kitayama, S. (1991). Culture and the self: implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, *98*(2), 224–253.

McAdams, D. P., & McLean, K. C. (2013). Narrative identity. *Current Directions in Psychological Science*, *22*(3), 233–238.

McAdams, D. P., & Pals, J. L. (2006). A new Big Five: Fundamental principles for an integrative science of personality. *American Psychologist*, *61*(3), 204–217.

McLean, K. C., Lilgendahl, J. P., Fordham, C., Alpert, E., Marsden, E., Szymanski, K., & McAdams, D. P. (2018). Identity development in cultural context: The role of deviating from master narratives. *Journal of Personality*, *86*(4), 631–651.

McLean, K. C., & Syed, M. (2016). Personal, master, and alternative narratives: An integrative framework for understanding identity development in context. *Human Development*, *58*(6), 318–349.

内閣府 (2016). 若者の生活に関する調査報告書 内閣府 Retrieved from <https://www.e-stat.go.jp/statistics/00100107> (2023年2月29日)

Sugimura, K. (2020). Adolescent identity development in Japan. *Child Development Perspectives*, *14*(2), 71–77.

鈴木 國文・古橋 忠晃・ナターシャ ヴェルナー (2014). 「ひきこもり」に何を見るか: グローバル化する世界と孤立する個人 青土社

Syed, M., & McLean, K. C. (2016). Understanding identity integration: Theoretical, methodological, and applied issues. *Journal of Adolescence*, *47*(1), 109–118.

Teo, A. R., Chen, J. I., Kubo, H., Katsuki, R., Sato-Kasai, M., Shimokawa, N., Hayakawa, K., Umene-Nakano, W., Aikens, J. E., Kanba, S., & Kato, T. A. (2018). Development and validation of the 25-item Hikikomori Questionnaire (HQ-25). *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, *72*(10), 780–788.

Triandis, H. C. (1995). *Individualism and Collectivism*. Westview Press.

Umeda, M., Kawakami, N., & World Mental Health Japan Survey Group 2002–2006 (2012). Association of childhood family environments with the risk of social withdrawal ('hikikomori') in the community population in Japan. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, *66*(2), 121–129.